

A 28 学校給食の実態(1) — S市の場合、食構成の12年間の変動—
甲子園短大 ○富田絹子 西田美枝子 山下慶子

目的 学童期は食品群の構成、献立ともにほぼ成人に近い。最近、食生活において砂糖、食塩の過剰摂取、食物繊維などが注目をあびているが、これらも含めて学校給食の実状を知るために12年間にわたる調査を行ったので報告する。

方法 対象はS市学校給食(36校、1日36500食)。昭和47年度より58年度まで12年間(2154日)分の献立表を用いた。前報と同様食品群は国民栄養調査食品群別表による21項目に分類各々の使用量と季節別、年度別、さらにA(昭47~50)、B(昭51~54)、C(昭55~58)の4年間ずつに区分、平均値(\bar{X})、標準偏差(SD)、変動率(CV)を算出した。また、各季節12年分の \bar{X} 、SD、CVも算出した。各食品群使用量の年度間、季節間の変動についてはt検定により比較検討した。

結果 I. 年度(A,B,C)比較。1) 増加傾向は① $A < B < C$ — 米および緑黄色野菜($p < 0.01$) ② $A < B, C$ — 果実類および肉類($p < 0.01$)。③ $A, B < C$ — 魚介類($p < 0.01$) 2) 減少傾向は① $A > B > C$ — 砂糖類($p < 0.001$)、調味料 $A > B$ ($p < 0.05$)、 $A > C$ ($p < 0.001$)。② $A > C > B$ — その他の野菜 $A > B$ ($p < 0.01$)、 $B > C$ ($p < 0.05$)。③ $A, B > C$ — 菓子類および油脂類($p < 0.01$) 3) 横ばい状態は乳類、卵類、加工食品であった。II. 季節(12年間の \bar{X})比較。1) 夏季、高値は油脂類($p < 0.001$)、その他の野菜、および調味料($p < 0.01$)。夏季、低値は豆類($p < 0.01$)、果実類および卵類($p < 0.05$)、など。2) 冬季、高値は米、豆類($p < 0.001$)、冬季、低値はその他の野菜($p < 0.05$)など。3) 秋季、低値は魚介類($p < 0.01$)であった。III. 各食品群使用量と標準食品構成値の比較では麦類、肉類の過剰、いも類、砂糖類、豆類、果実類、緑黄色野菜、魚介類の不足を示した。